虱

芥川龍之介

一

元治（げんぢ）元年十一月二十六日、京都守護の任に当つてゐた、加州家の同勢は、折からの長州征伐に加はる為、国家老（くにがらう）の長大隅守（おほすみのかみ）を大将にして、大阪の安治川口（あぢかはぐち）から、船を出した。

小頭（こがしら）は、佃久太夫（つくだきうだいふ）、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟（しろのぼり）、山岸組の船には赤幟が立つてゐる。五百石積の金毘羅（こんぴら）船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は、如何（いか）にも勇ましいものだつたさうである。

しかし、その船へ乗組んでゐる連中は、中々勇ましがつてゐる所の騒ぎではない。第一どの船にも、一艘に、主従三十四人、船頭四人、併（あは）せて三十八人づつ乗組んでゐる。だから、船の中は、皆、身動きも碌（ろく）に出来ない程狭い。それから又、胴の間（ま）には、沢庵漬（たくあんづけ）を鰌桶（どぢやうをけ）へつめたのが、足のふみ所もない位、ならべてある。慣れない内は、その臭気を嗅ぐと、誰でもすぐに、吐き気を催した。最後に旧暦の十一月下旬だから、海上を吹いて来る風が、まるで身を切るやうに冷い。殊に日が暮れてからは、摩耶颪（まやおろし）なり水の上なり、流石（さすが）に北国生れの若侍も、多くは歯の根が合はないと云ふ

始末であつた。
その上、船の中には、虱（しらみ）が沢山ゐた。それも、着物の縫目にかくれてゐるなどと云ふ、生やさしい虱ではない。帆にもたかつてゐる。幟にもたかつてゐる。檣（ほばしら）にもたかつてゐる。錨（いかり）にもたかつてゐる。少し誇張して云へば、人間を乗せる為の船だか、虱を乗せる為の船だか、判然しない位である。勿論その位だから、着物には、何十匹となくたかつてゐる。さうして、それが人肌にさへさはれば、すぐに、いい気になつて、ちくちくやる。それも、五匹や十匹なら、どうにでも、せいとうのしやうがあるが、前にも云つた通り、

白胡麻(しろごま)をふり撒いたやうに、沢山ゐるのだから、とても、とりつくすなどと云ふ事が出来る筈のものではない。だから、佃組と山岸組とを問はず、船中にゐる侍と云ふ侍の体は、悉(ことごと)く虱に食はれた痕(あと)で、まるで麻疹(はしか)［＃「麻疹」は底本では「痳疹」］にでも罹(かか)つたやうに、胸と云はず腹と云はず、一面に赤く腫れ上がつてゐた。

　しかし、いくら手のつけやうがないと云つても、そのまま打遣(うつちや)つて置くわけには、猶(なほ)行かない。そこで、船中の連中は、暇さへあれば、虱狩をやつた。上は家老から下は草履取(ざうりとり)まで、悉く裸になつて、随所にゐる虱をてんでに茶呑茶碗の中へ、取つては入れ、取つて

は入れするのである。大きな帆に内海の冬の日をうけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍が、湯もじ一つに茶呑茶碗を持つて、帆綱の下、錨の陰と、一生懸命に虱ばかり、さがして歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だと云ふ感じが先に立つが、「必要」の前に、一切の事が真面目になるのは、維新以前と雖も、今と別に変りはない。——そこで、一船の裸侍は、それ自身が大きな虱のやうに、寒いのを我慢して、毎日根気よく、そこここと歩きながら、丹念に板の間の虱ばかりつぶしてゐた。

二

所が佃組の船に、妙な男が一人ゐた。これは森権之進（ごんのしん）と云ふ中老のつむじ曲りで、身分は七十俵五人扶持（ぶち）の御徒士（おかち）である。この男だけは不思議に、虱をとらない。とらないから、勿論、何処（どこ）と云はず、たかつてゐる。髷（まげ）ぶしへのぼつてゐる奴があるかと思ふと、袴腰のふちを渡つてゐる奴がある。それでも別段、気にかける容子（ようす）がない。

ではこの男だけ、虱に食はれないのかと云ふと、又さうでもない。やはり外（ほか）の連中のやうに、体中

金銭斑々（きんせんはんはん）とでも形容したらよからうと思ふ程、所まだらに赤くなつてゐる。その上、当人がそれを掻いてゐる所を見ると、痒（かゆ）くない訳でもないらしい。が、痒くつても何でも、一向平気で、すましてゐる。

すましてゐるだけなら、まだいいが、外の連中が、せつせと虱狩をしてゐるのを見ると、必（かならず）わきからこんな事を云ふ。――

「とるなら、殺し召さるな。殺さずに茶碗へ入れて置けば、わしが貰うて進ぜよう。」

「貰うて、どうさつしやる？」同役の一人が、呆（あき）れた顔をして、かう尋ねた。

「貰うてか。貰へばわしが飼うておくまでぢや。」
森は、恬然（てんぜん）として答へるのである。
「では殺さずにとつて進ぜよう。」
同役は、冗談（じようだん）だと思つたから、二三人の仲間と一しよに半日がかりで、虱を生きたまま、茶呑茶碗へ二三杯とりためた。この男の腹では、かうして置いて「さあ飼へ」と云つたら、いくら依怙地（えこぢ）な森でも、閉口するだらうと思つたからである。
すると、こつちからはまだ何とも云はない内に、森が自分の方から声をかけた。
「とれたかな。とれたらわしが貰うて進ぜよう。」

同役の連中は、皆、驚いた。

「ではここへ入れてくれさつしやい。」

森は平然として、着物の襟(えり)をくつろげた。

「痩我慢をして、あとでお困りなさるな。」

同役がかう云つたが、当人は耳にもかけない。そこで一人づつ、持つてゐる茶碗を倒(さかさま)にして、米屋が一合枡(ます)で米をはかるやうに、ぞろぞろ虱をその襟元へあけてやると、森は、大事さうに外へこぼれた奴を拾ひながら、

「有難い。これで今夜から暖(あたたか)に眠られるて。」といふ独語(ひとりごと)を云ひながら、にやにや笑つてゐる。

「虱がゐると、暖うこざるかな。」

呆気（あつけ）にとられてゐた同役は、皆互に顔を見合せながら、誰に尋ねるともなく、かう云つた。すると、森は、虱を入れた後の襟を、丁寧に直しながら、一応、皆の顔を莫迦（ばか）にしたやうに見まはして、それからこんな事を云ひ出した。

「各々は皆、この頃の寒さで、風をひかれるがな、この権之進はどうぢや。嚔（くさめ）もせぬ。洟（はな）もたらさぬ。まして、熱が出たの、手足が冷えるのと云うた覚は、嘗（かつ）てあるまい。各々はこれを、誰のおかげぢやと思はつしやる。――みんな、この虱のおかげぢや。」

何でも森の説によれば、体に虱がゐると、必(かならず)ちくちく刺す。刺すからどうしても掻きたくなる。そこで、体中万遍なく刺されると、やはり体中万遍なく掻きたくなる。所が人間と云ふものはよくしたもので、痒いと思つて掻いてゐる中に、自然と掻いた所が、熱を持つたやうに温くなつてくる。そこで温くなつてくれば、睡くなつて来る。睡くなつて来れば、痒いのもわからない。——かう云ふ調子で、虱さへ体に沢山ゐれば、睡(ね)つきもいいし、風もひかない。だからどうしても、虱飼ふべし、狩るべからずと云ふのである。……

……

「成程、そんなものでござるかな。」同役の二三人は、森の虱論を聞いて、感心したやうに、かう云つた。

三

それから、その船の中では、森の真似をして、虱を飼ふ連中が出来て来た。この連中も、暇さへあれば、茶呑茶碗を持つて虱を追ひかけてゐる事は、外の仲間と別に変りがない。唯、ちがふのは、その取つた虱を、一々刻銘（こくめい）に懐（ふところ）に入れて、大事に飼つて置く事だけである。

しかし、何処の国、何時の世でも、Précurseur の説が、そのまま何人にも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論にの説が、そのまま何人にも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論に反対する、Pharisien が大勢ゐた。

中でも筆頭第一の Pharisien は井上典蔵と云ふ御徒士である。これも亦妙な男で、虱をとると必ず皆食つてしまふ。夕がた飯をすませると、茶呑茶碗を前に置いて、うまさうに何かぷつりぷつり噛んでんでゐるから、側へよつて茶碗の中を覗いて見ると、それが皆、とりためた虱である。「どんな味でござる？」と訊

くと、「左様さ。油臭い、焼米のやうな味でござらう」
と云ふ。虱を口でつぶす者は、何処にでもゐるが、こ
の男はさうではない。全く点心(てんしん)を食ふ気で、毎日虱を
食つてゐる。——これが先(まづ)、第一に森に反対した。
　井上のやうに、虱を食ふ人間は、外に一人もゐない
が、井上の反対説に加担をする者は可成(かなり)ゐる。この連
中の云ひ分によると、虱がゐたからと云つて、人間の
体は決して温まるものではない。それのみならず、孝
経にも、身体髪膚之(しんたいはつぷこれ)を父母に受く、敢(あへ)て毀傷(きしやう)せざるは
孝の始なりとある。自(みづから)、好んでその身体を、虱如き
に食はせるのは、不孝も亦甚しい。だから、どうして

も虱狩るべし。飼ふべからずと云ふのである。……

かう云ふ行きがかりで、森の仲間と井上の仲間との間には、時折口論が持上がる。それも、唯、口論位ですんでゐた内は、差支へない。が、とうとう、しまひには、それが素で、思ひもよらない刃傷沙汰さへ、始まるやうな事になつた。

それと云ふのは、或日、森が、又大事に飼はうと思つて、人から貰つた虱を茶碗へ入れてとつて置くと、油断を見すまして井上が、何時の間にかそれを食つてしまつた。森が来て見ると、もう一匹もない。そこで、この Précurseur の説が、そのまま何人にも容れられ

ると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論にが腹を立てた。

「何故、人の虱を食はしつた。」

張肘（はりひぢ）をしながら、眼の色を変へて、かうつめよると、

井上は、

「自体、虱を飼ふと云ふのが、たはけぢやての。」と、

空嘯（そらうそぶ）いて、まるで取合ふけしきがない。

「食ふ方がたはけぢや。」

森は、躍起となつて、板の間をたたきながら、

「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。その虱を取つて食ふなどとは、恩を仇でか

へすのも同前ぢや。」
「身共は、虱の恩を着た覚えなどは、毛頭ござらぬ。」
「いや、たとひ恩を着ぬにもせよ、妄に生類の命を断つなどとは、言語道断でござらう。」
二言三言云ひつのつたと思ふと、森がいきなり眼の色を変へて、蝦鞘巻の柄に手をかけた。勿論、井上も負けてはゐない。すぐに、朱鞘の長物をひきよせて、立上る。――裸で虱をとつてゐた連中が、慌てて両人を取押へなかつたなら、或はどちらか一方の命にも関る所であつた。
この騒ぎを実見した人の話によると、二人は、一同

に抱きすくめられながら、それでもまだ口角に泡を飛ばせて、「虱。虱。」と叫んでゐたさうである。

四

かう云ふ具合に、船中の侍たちが、虱の為に刃傷沙汰を引起してゐる間でも、五百石積の金毘羅船だけは、まるでそんな事には頓着しないやうに、紅白の幟を寒風にひるがへしながら、遙々として長州征伐の途に上るべく、雪もよひの空の下を、西へ西へと走つて行つた。

（大正五年三月）

底本：「現代日本文学大系　43　芥川龍之介集」筑摩書房
１９６８（昭和43）年８月25日初版第１刷発行
入力：j.utiyama
校正：野口英司
１９９８年３月16日公開
２００４年３月９日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。